

紅顔の美少年大なる希望黒龍江へ

静岡県 望月寅雄

昭和十六年三月、卒業式の翌日、満州開拓青少年義勇軍として茨城県内原訓練所へ。親元を離れての団体生活三カ月間の訓練は厳しかった。六月、満州へ渡る。北満黒河省（黒龍江省）瓊瑋県大額訓練所、五個中隊千五百人、義勇軍最北端の中訓練所だった。ロシアとの国境線黒龍江（アムール川）まで四キロメートル。北緯五十度二十分、東経百二十七度十八分。満州での最初の冬。しんしんと降る雪。シベリアオオカミの遠吠え。満州領で上がるのろし火。ロシア領でも上がる青白い不気味な光。スパイ同士の合図の光だとか……。黒龍江が凍結すると光の回数が多くなった。屯墾病（ホームシック）で夜になると泣いてる拓友が何人かいた。なぜこんな国境線まで……？

見通しの良い丘からロシアの警備兵が見えた。関東

軍の守備隊員も増員され、ロシア領をにらんでいる。また、私服（満服）の兵隊が大勢いた。寂しい……。恐ろしい……。いやな十五歳の冬だったこと、また、異様な時期だったことが記憶にある。

十二月八日、日本は米英と戦争するという、私達少年にはピンとこなかった。

昭和十九年四月、開拓団への基礎訓練三カ年終了。二百町歩の土地に龍北義勇隊開拓団結成。地名、黒河省瓊瑋県山神府金吹駅気付阿拉浜。国境線まで五キロメートル。二百五十一人だった隊員も、家庭事情で離隊する者、入営する者、召集される者等々で百五人までになってしまった。

私は二十年二月十一日、徴兵検査甲種合格。四月二十七日、黒河省孫呉満州第二百二十三師団二百七十連隊本部付乗馬小隊入隊。有線、無線の使用不能時の伝令要員だった。身長百七十七センチ、体重七十二キロ、出るべき所の毛も出揃っていた。東条英機が戦場の兵と国民の士気の高揚目的で布達した戦陣訓の一節に「生きて虜囚の辱めを受けず」とある。義勇軍で戦陣訓は

暗記できるよう教えられた。また、馬の取り扱いができない者は、義勇軍では一人前ではなかった。入隊後、大平原での乗馬伝令訓練は、特技の一つとして自信と確信を持っていた。日本軍人の一人として、体力的にも精神的にも自信満々の初年兵だった……。

二十年八月八日、突如ロシア軍侵入。陣地へ移動。暑い、暑い、雨、雨の戦場。我が乗馬小隊中村上等兵、低空の機銃掃射で戦死。大きなナラの木の下へ葬った。最初の犠牲者。

終戦、武装解除。様々なデマが流れた。内地へ帰れる……。ロシアへ連れていかれる……。拳銃で自決する人。いやな日々。「満州に四年もいたのだから一緒に逃亡しないか」と将校、下士官、古年兵から何回も誘われた。「今がチャンスだぞ……」。初年兵として返す言葉がなかった。「はい」と返事はできなかった。日本へ帰してもらえる望みを持っていたから……。

国境陣地の地下倉庫から軍事物資、被服、食糧、甘味品、毛布、地下足袋まで何でもたくさん持ってもよいと言う。一個大隊千人、三個大隊同一行動で、孫呉

出発。九月十日ころ、自動小銃を持った監視兵の厳戒体制。威嚇の発砲を空へ、地面へ。脅しである。日本へ帰すのになぜ南へ行かないのか……。軍用道路を東へ、東へ。激戦で倒れた住民の死体。軍馬の死骸。日本軍の自動車、兵器。ロシア軍最新型戦車M51もキャタピラが破壊され、無残な姿を何台か見た。激戦であったことを思い出しながら、東へ東へ。持ち物が重くて捨てる人、それを拾う人。黒龍江の下流からウラジオストックへ、日本海へ、だれもがそのために励まされた。助け合っでの行進。三千人は、長蛇の列になった。

川岸の平地に急造の舟着場に貨物船が。馬や牛の鳴き声がある。乗船命令。戦利品の家畜と一緒に、ウラジオストックから日本へ行かれるなら……。甲板へすし詰め。換気用の穴から船倉を見たら軍馬がいた。やせこけた馬体、哀れな姿。同じ船で、馬が哀れなら俺も哀れなんだ……。軍馬との視線の会話が何分間か……。五時間くらい後に船が川の中央より進行方向左側、ロシア領に近く、満州領が遠くなってい

く。川幅七キロメートルくらい、急造の船着場。下船命令。軍馬よ、サヨナラ、サヨナラ。馬が泣いている、声を出して。ウラジオへの夢は消えた。

これがシベリア抑留の第一歩か。「ダバイ、ダバイ、ヴィストラ（早く早く歩け）」、監視兵の銃剣で突き飛ばされながら北東へ北東への行進はとほとぼ、最後尾が見えない。本当に長蛇だ。逃亡した人達は？ 俺もいっしょにいけばよかったかな？ 「三年は帰れないかな。いや五年だ。十年くらいかもしれないぞ」色々なデマ。「逃亡しないか」とまた誘われた。見習士官の若い青年将校の割腹自決者が出た。また、厳しい所持品検査だ。自決者は、長靴の中にドスを持っていたとか。毎日が暗い、暗い。いやなことばかり。シベリアの大平原に部落が見えてきた。集団農場（コルホーズ）だ。そこで秋の取り入れの仕事をすることになった。小麦刈り、いも掘り、野菜収穫、久しぶりの野菜の補給ができた。

七日間くらい、あの農場からこちらの農場へ。手持ちの食糧もなく、農場で黒パンが出た。とても口に合

わない。焼きいもの方がよかった。どこの農場でも寝る所は倉庫、馬小屋、豚小屋、鳥小屋、民家の軒下。十月下旬、マイナス十五度〜二十度くらいだったか、寒くて寝られない。みんな体を寄せ合って休む。逃亡をあきらめられない人から、夜になると、「どうだ、行こうよ」とまた誘われた。大きな農場、朝鮮系（黄色人）だ。私達に好意的な取り計らいで、寝る所は、各家の土間通路を片付け休ませてくれた。仕事も他の部落のように強要はしなかった。

十一月になるというのに、どこへ連行されるのか。日の出と夕日からすると、まちがいに北東へ、北東へだ。今日も「ヴィストラ、ダバイ、ダバイ」。だれにもしらみが発生し、行進の休憩時、日なたぼっこしながらしらみをとる姿。顔はどす黒く、哀れという寂しい言葉の外はない。部落を出て間もなく汽笛のような音。手を耳にかざしよく聞く。汽笛だ、汽笛だ。その音に笑顔が。シベリア鉄道からウラジオへ、日本海へ。みんなまた元気が出た。

「今度は帰れるぞ、間違いなく日本へ帰れるぞ」。

励まし合いながら汽笛の方向へ。監視兵に汽車の車輪の回る仕草を手まねしたら、東京ダモイ（帰る）だと言う。みんな、「オー、万歳、万歳」。町が見える。汽車も、給水塔も。高い望楼が有刺鉄線を張り、さくになっっている。望楼が四隅にある。大きな扉の所に自動小銃を持った兵隊も……。敷地も広く、一辺が五百メートルくらいか。私達は先頭大隊、三個大隊が到着するまで半日以上も、長蛇の列がよたよたと足を引きずって到着した。点呼（人員調べ）監視兵から收容所（ラーゲル）監視兵への引き渡しか。今までの監視兵が最後の所持品検査。各自帽子やふんどしにまで大事なものを縫い付けて大切にしていたものまで全部取り上げられた。日本へ持って帰れると我慢してやっと持ってきたのに、丸裸にされた。なんでこんな事を、敗戦国のみじめさを身をもって知った。汽車を見て万歳万歳はどこへやら。五人ずつ入門開始。昭和二十年十一月中旬頃、あの望みも希望も夢もまったく絶望になった。三年になるか五年間になるのか、見当がつかない。これから冬を迎える極寒のシベリアで生きられる

のか……。

アムール州ライチハ第十九收容所への入門で決定的になった。

昭和十六年から二十年までの出来事であらまします。

青春時代に

抑留生活を過ごした苦い思い出

静岡県 後藤政雄

私は昭和十八年一月十日、福岡集合、関釜連絡船にて朝鮮釜山港に上陸。鉄道輸送で京城（ソウル）第二十六部隊に一時的に入隊。約一、二カ月だったと記憶しています。その後、満鉄で一路国境の街ハイラルに向かい、約一週間くらいで、真夜中ハイラル駅に到着、原隊出迎えのトラックに乗せられ第八国境守備隊野砲兵隊に無事入隊。初年兵一期の教育後、諸々部隊に転属、最後に奉天にて電信第三十一部隊に入り、東